沖縄における英語教育と言語帝国主義
～沖縄キリスト教学院大学の事例から～

新　垣　　誠

要　約

英語が事実上の「世界共通語（リンガ・フランカ）」になったと言われて久しい。しかし英語という「共通語」は中立的ではない、と「言語帝国主義」は警告する。アメリカの文化帝国主義や英語支配を通して、英語は世界で差別的構造を作り出しているのだ。戦後の沖縄では、米軍による支配が1972年まで続き、なおも広大な米軍基地が存在する。物理的にも文化的にもその影響は強大なものがあり、基地経済の拡大とともにアメリカ文化至上主義も浸透した。以来、特に英語を学ぶ学生たちの間には、アメリカ文化と英語を単なる社会的地位向上のためのツールとして習得するのではなく、自らのアイデンティティさえもアメリカ文化へと同化していく現象が起こっている。「言葉の乗り換え」が「自己の乗り換え」を引き起こす植民地精神への改造が進んでいるのだ。沖縄キリスト教学院大学英語コミュニケーション学科に在籍経験のあ る女子学生に２年間にわたる聞き取り調査をおこない、その結果をもとに沖縄におけるアメリカ文化至上主義と英語支配、そして「自己の乗り換え」の現実は深刻なものがある。大学における英語教育と建学の精神の整合性が問われる今、沖縄 にとって必要な英語教育のあり方とは異文化理解と自らの沖縄文化に対する認識を深めることだ。

ベーシック英語を普及させることは、
イギリスにとって広大な領土を併合するよりもはるかに永続的で実り多い利益になる。
（ウィンストン・チャーチル）

何百万人の人に英語の知識を与えることは、その人たちを奴隷にすることである。
（マハトマ・ガンジー）

キーワード：言語帝国主義、英語教育、在沖米軍基地、文化的アイデンティティ、異文化理解

はじめに　～沖縄と植民地精神～

私が４歳の時、父はフルブライト奨学生としてアメリカのカンザス大学大学院で言語学を学ぶために旅立った。沖縄で中学校の英語教師をしていた父にとって米留学は長年の憧れだった。私と生まれたばかりの妹、そして同じく中学校教諭だった母を沖縄に残してまででも、その夢は叶えたかったのだろう。

父の後ろ姿を見て育った私自身もアメリカへの留学を夢見た。高校生の時はロックバンドでボーカルを担当し、とにかく英語の歌詞を覚えるのが好きだった。自由、エネルギー、反骨精神、そんな言葉に象徴されるかのようなアメリカ文化に強く魅了されていた。コザ（現在の沖縄市）の基地周辺にあるライブハウスへバスで通い、酔って大暴れする米兵の中に混じって、ステージ上の混血のミュージシャンが奏でる「本物」のロックサウンドを習得しようと必死だった。帰りのバスではオレンジ色のライトが眩しいキャンプ・フォースターの明かりを車窓から眺めながら、いつかはあのフェンスの向こうに行くと決意した。アメリカへ移住して、もう沖縄には帰ってこないと思っていた。

逆に沖縄の文化に対しては、生理的とも言えるほどの拒否反応を示し、「田舎臭い」上に後進的でダサいと思い、三線の音色や「方言」の響は泥臭くて嫌だと感じていた。沖縄文化はいずれ消滅する年寄りのものと信じ、方言訛りで日本語を喋る人たちを、民度の低い人間と思い、心底見下していた。

そんな私は両親に嘆願し、高校を卒業したら大学からアメリカへ留学した。もちろん父親の影響もあったが、何よりもロックを通してアメリカ文化と英語にどっぷり浸かっていた私の目標は、「アメリカ人」になることだった。

留学先でもアメリカ文化の洗礼をより多く受けた沖縄は、日本本土より上だと思っていた。のちに人種差別やヘイトクライムなどアメリカ社会の闇の部分に直面し、ナイーブな幻想から目覚めることになるが、当時の私はアメリカ文化に支配される「植民地精神」に

染まっていた。しかし日本復帰前に沖縄で生まれた私と同じ世代の人々にとって、私のようなケースは特殊ではないだろう。

アメリカの大学で学位を修めたのち、沖縄キリスト教学院大学で職を得ることになるが、私がアメリカで高等教育を受け、英語の運用能力を有していることは、就職の際の大きな要因になったようだ。私の高校生時代から30年という時間が過ぎた。1990年代には全国で沖縄文化が一大「ブーム」となり、那覇市などの自治体は琉球語を使った挨拶を奨励している。教育現場では文化を含む様々な「多様性」が重視され、異文化理解教育や国際理解教育も盛んである。

国際社会では、異文化理解どころか異なった宗教や民族間での紛争は激化し、国際的なテロリズムの恐怖が身近に感じられる。かつて地上戦を経験し多くの犠牲者を出した沖縄においては戦争体験者が高齢化し、戦場の記憶が風化するとの危惧がある。そんな中、教育現場においては平和教育の重要性が高まっている。沖縄キリスト教学院大学においても、キリスト教に並び、平和と沖縄が建学の精神のキーワードとなっている。

しかしながら沖縄において米軍基地の強固な存在は、物理的なものにとどまらず、その社会的影響力は急速に進むグローバリゼーションの元、以前にも増しているのではないかと思われる。かつて植民地精神に染まった私のような若者は、もう歴史小説の登場人物としてしか見られないと思っていたが、日常的に大学生たちと対峙している中で、その認識は間違っていると気づかされた。現在でも多くの沖縄の学生が強力なアメリカ文化の影響力と英語支配のもと英語教育を受け、その学生たちを通して植民地精神は脈々と行き続けている。

建学の精神と教育目的を意識し、日々の教育に励む中で本学院の英語教育と建学の精神の整合性に個人的にほころびを感じ、その矛盾に直面し苦悩する中で、改めて沖縄における英語教育と異文化理解教育を、『アメリカ文化』と『英語支配』との関連性において考察する必要性を感じた。本稿では、沖縄キリスト教学院大学を例に、学生へのインタビューを通して沖縄における『言語帝国主義』の現状を考える。

Ⅰ．沖縄キリスト教学院大学と英語教育
～仕えるべき隣人とは誰か？～

沖縄キリスト教学院は、そのスクールモットーを「仕えられるためにではなく仕えるために（マタイ20：28）」と謳っている。それは「キリストの謙遜さに倣い、隣人へ奉仕する（マタイ20：28）人材の育成を教育の使命とする」という建学の精神に根ざしている。

1957年に建学された学院には、太平洋戦争下での皇民化教育による戦争加担への反省があった。そして戦後沖縄の再建には「キリスト教の精神を身につけた人材の養成が緊要であることを確信」し、学院が設立された当時の募集要項には記されている。ここでいう「キリスト教精神」とは、「聖書が証するイエス・キリストの十字架のあがないにより人類に示された和解と平和（エフェソ２：15～16）に基づき、他民族と異文化の理解を深め、他者へ仕え、少数者の人権を尊重するもの」とされている。故に学院は「この精神に立脚しつつ、過去には凄惨な地上戦を体験し、現在も軍事基地を抱える沖縄から世界へ平和を訴え発信してゆく『平和を実現する人』（マタイ５：９）」の育成を合わせて教育の使命としている。

それまで短期大学のみだった学院に、2004年、四年制大学である沖縄キリスト教学院大学人文学部「英語コミュニケーション学科」が設立された。新学科は教育研究目的を下記のように定めている。

> 国際化・グローバル化する世界の文化・経済・政治等の国際交流の場において、事実上の国際共通語（de facto international language）となっている英語において、高度のコミュニケーション能力を以って、効果的かつ分別をもって運用できる人材を育成する。

グローバリゼーションが世界を席巻し、英語が事実上の国際共通語になっていることから、高度な英語運用能力を身につけ、国際的舞台において活躍できる人材の育成が教育目的とされている。かつて「英語のキリ短」として名を馳せ、「生きた英語」を学べるということで沖縄県内ではブランド力のあったそのネームバリューを生かして英語を中心としたカリキュラム構成となっている。しかしこの時代は「ポストコロニアル理論」の潮流が日本でも流行り、継続する帝国主義や

植民地主義に対する批判的言説を量産していた時でもある。特に近代国家日本の周縁にありながら「日本」と「アメリカ」という二大覇権から支配を受けた歴史を持つ沖縄に関しては、文化や歴史など広範囲に渡って批判的考察がおこなわれていた。また1991年に出版されたジョン・トムリンソンの「文化帝国主義」そして1992年に出版されたロバート・フィリプソンの「言語帝国主義」が起爆剤となり、日本における「アメリカ文化支配」や「英語支配」が盛んに議論されるようにもなっていた。そして今日、文部科学省が提示する新たな英語教育の指針に関して、さらなる「英語支配」を強めるのではないかとの懸念も広がっている。

グローバリゼーションがアメリカナイゼーションと同義語に理解されて久しい。パクス・ロマーナからパクス・ブルタニカを経てパクス・アメリカーナに至る歴史は、世界において絶対的・永続的覇権など存在しないことを証明している。しかし今なおアメリカの国際社会における優位性は強固なものがあり、中国との覇権争いの地政学的最前線である沖縄にあって、その軍事力に付随する文化的影響も強力なままだ。

そのような状況下において、英語を単なる「学習言語」として無批判に受け入れ、国際関係の権力構造から切り離して考えることは、「少数者の人権を尊重し」、「平和を実現する人」の育成という学院の建学の精神に対する不協和音を奏でることにはならないか。英語が「世界共通語」と化した歴史的理由や、グローバリゼーションという名のアメリカナイゼーションに対する批判的思考が欠如したまま、英語学習を推進することは、学院の教育活動が「英語支配」に加担することになるだろう。

「世界そして沖縄の平和・共生のために仕えるのか。それともアメリカ軍事主義に仕えるのか」。この問いはまた、沖縄キリスト教学院大学英語コミュニケーション学科のみならず、現在の沖縄そして広くは日本の英語教育が抱える命題ともいえる。

戦後72年間の米軍による統治は、多岐に渡って沖縄人に多大な影響を及ぼした。そしてなおも広大な米軍基地がある沖縄において、アメリカナイゼーションと英語支配は日本本土と比べものにならないほど強大な力を持つ。それは戦後72年に渡って培われた沖縄人の精神構造の改造ともいえるだろう。この章では、米兵と交際する沖縄キリスト教学院大学の女子学生５人と、戦争体験者でありながら、自らの子どもが米兵と国際結婚した２人のナラティブを紹介するとともに、その言説に存在する「アメリカナイゼーション」と「英語支配」について考察をおこなう。

次章では、本学の学生や社会人に対しておこなったインタビューから、生の声を通して「アメリカ文化」そして「英語支配」の現状を見つめてみたい。2014年から2016年までの２年間、英語コミュニケーション学科の女子学生で米兵と交際している12人に聞き取り調査をおこなった。本学科において女子学生の数は、全学生数の約75パーセントを占める。それゆえに今回は、学科の大多数である女子学生に焦点を当てて調査をおこなった。その中から５人のインタビュー内容をもとに考察をおこなう。また、沖縄戦体験者で娘が米兵と国際結婚した経験を持つ５人にもインタビューをおこなった。ここではその中の２人のナラティブを紹介してある。本人のプライバシーに配慮して名前は仮名で記載した。

Ⅱ．女子学生への在沖米軍基地と英語支配の影響

「やっぱり国際化の時代でしょ。沖縄の人は昔から国際的だったし」。本学の在学生である嘉数満里奈（仮名）のように、アメリカ人との交際を「国際化」の結果と捉える学生は少なくない。高度経済成長を遂げた日本が、国際社会からその責任を問われ、急激に国際化を国是と掲げた1980年代以来、沖縄社会においても「国際化」は必要かつ肯定的な社会現象として捉えられている。戦争体験者もしくは戦後の混乱を必死で生き抜いてきた祖父母との世代にとって、米軍基地は今も地獄のような戦場の記憶を想起させるものであり、米軍支配下の沖縄の辛い体験の元凶として象徴的な存在である。しかしながら、そのような記憶を共有しない現在の若者にとって、米軍基地は「国際化」や「国際交流」の場であり、アメリカという憧れの異文化に触れることのできるポジティブな存在なのだ。同時に米軍基地の存在に否定的な前世代へは「視野が狭い」や「偏見に満ちた」、「差別的」などといった言葉で批難する。米兵との付き合いを反対する祖父母に対して、「なんでそんなに差別できるのか、本当に悲しくなる」といった意見を持つ。

「別にアメリカ人を嫌っているわけではない。ただ戦争のことが・・・」。92歳になる喜瀬カヨ（仮名）

は米軍基地の集中する沖縄県中部のコザで子育てをし、２人の娘と１人の孫娘が米兵と結婚した。彼女は戦後の米収容所で友人が米兵に強姦された事件を語った。またベトナム戦争下の沖縄で、毎晩のように酒を煽って暴れる米兵のことが忘れられないと言った。

81歳になる東江勇吉（仮名）は、娘がアメリカ人と結婚するという話を聞いて恐怖を感じたという。実の母親が米収容所で集団レイプされ妊娠し、その後中絶した経験を持つ。当時まだ幼かった彼は、戦後何年か経った後に、その話を兄から聞かされたという。「アメリカ人は性的に暴力的なのでは」という疑念とともに、母親が娘と重なり恐怖を感じたと語った。娘がアメリカ人と結婚すると聞いて不眠が続き、母の思い出とともに涙が出てきたと言う。

沖縄戦と戦後の米軍支配を知る世代に「米軍基地＝国際化」という考えはない。彼らの多くは、米軍基地が一刻も早く沖縄から撤去され、家族そして沖縄が平和であることを心から願っている。沖縄キリスト教学院大学の建学の精神は、まさにその願いと共鳴するものだ。しかしながら、大学で学ぶ多くの学生は「グローバル化・国際化という新しい時代の国際交流の場」として米軍基地を捉えている。そこは自分自身が国際化し、新しく生まれ変わるために必要な場としてむしろ欲望の対象となる。

祖父母や親から米軍に対する肯定的な意見を聞いて育った学生もいる。そのような学生は、主に基地周辺でビジネスを営んでいた家庭に多く見られる。米空軍基地がある嘉手納町で22年間育った与那嶺さくら（仮名）は、祖父が米兵相手の商売をしていた。「嘉手納基地の周り、そしてコザの町で育った自分にとって、米兵の存在は日常生活の一部だった」と語る。戦後、米軍基地に付随する経済に頼っていた沖縄人は多い。彼女の家族も例に漏れない。彼女の祖父は嘉手納基地を出てすぐの「ゲート通り」で床屋を営んでいて、多くの米兵を顧客として抱えていた。米兵は、袋いっぱいのキャンディーを持ってきて、彼女の母親や他の子ども達に配っていたと、祖父から聞かされたという。その頃まだ幼い彼女の母は、米兵がさった後のチップを椅子の上で見つけては、その一ドル札を持ってアイスクリームを買いに行ったそうだ。当時一ドルは360 円であり、子どもにとっては大金である。彼女の家族は日頃からビジネスを通して米兵との付き合いが多く、彼女の母親も米兵に対しては好意的だったと話す。彼女の母親は、彼女がまだ幼い時に、よく嘉手納基地内のフェスティバルやフリーマーケットに彼女を連れて行ったという。国際的になることを目指していた母親だが、家庭の経済的事情により、望んでいた米留学や英語を使った仕事に就く夢は叶わなかったという。

「お母さんは、私に国際的になって欲しかったんだと思う。お母さんが叶えられなかった夢を私に叶えて欲しかったのかも」と彼女は回顧する。

彼女はまた、なぜ彼女自身が英語好きでアメリカ文化に親しみを感じているのか、その理由を母親の育児に見出している。

> お母さんは私を妊娠している時から、よくベース（基地内）のイベントに行っていたみたい。生まれた後も、ベビーカーに乗せてよく行っていたみたいよ。周りの人は、フリーマーケットみたいな埃まみれでカビ臭い古着があるところに赤ちゃんの私を連れて行くなって注意していたみたいだけど。お母さんは本当にアメリカが好きだったのよ。私は生まれる前からアメリカ文化に触れていて、アメリカの文化の中に生まれたようなものよ。ちっちゃい時もお母さんは私を米軍が主催する英会話スクールに連れて行ったわ。私はアメリカ文化と英語の強い影響のものに育ったのよ。だからこんなにアメリカが大好きなんだと思う。

現在、彼女は付き合っていた米兵と大学卒業後結婚し、アメリカで生活している。

彼女のように母親からの影響を強く受けた学生は他にもいる。大学四年次の神谷有紗（仮名）も「アメリカナイズされた母親」から育てられて、影響を受けたと言う。彼女が３、４歳の時に母親がよくドライブに連れ出し、大音量のレゲエをかけながら国道58号線をクルージングしていた、と笑いながら彼女は言う

> お母さんは長女だったんだけど、家庭が貧しかったわけね。大学にも行けたんだと思うけど、高校卒業してすぐに働いたみたい。22歳の時に結婚して私が生まれたのが23歳の時。色々と思い描いていた夢が叶わなかったみたい。国際人になって英語をペラペラ喋れるようになることが、夢のひと

つだったみたいね。私も長女で、お母さんは私を溺愛したのね。自分がなれなかった人間に私を育てたかったみたい。

彼女のような大学生を持つ母親の世代は、沖縄の復帰前後の生まれであり、好調に経済成長を遂げていく日本本土を後ろから羨ましそうに追いかけた世代でもある。遅延する沖縄経済の中で育ち、フェンスの向こうの豊かなアメリカに憧れを抱きながらも、沖縄社会の貧しさと混乱を経験した人も少なくない。そのような経験から自分の娘に自己を投影し、代理達成を図る母親もいたのだろう。

お母さんは、米兵と付き合うこともできたはずだけど、そうはしなかったみたい。米兵にはいい人も悪い人もいるだろうけど、恋愛するとなるとそれは別の話だよ、って言ってた。あれだけアメリカ人まみれで育ってアメリカの文化にどっぷり浸かっていたのに、お母さんにはアメリカ人に対する偏見があったのかな。

・・・でもね、お母さんは本当にアメリカの文化が好きだった。アメリカに行くことがお母さんの長年の夢で、結婚する時にお父さんを脅して言ったみたい。「ハネムーンでアメリカに行かないなら結婚しない」ってね。もう歳なのに、未だに英語を話したいって気持ちが強いのよ。今でもベース内のフリマ（フリーマーケット）に行くわ。時々「お母さんと同じくらいの年のアメリカ人女性で友達になりたい人いないかしら」って私に聞いてくるし。

このように二世代に渡ってアメリカ文化と英語のヘゲモニーを確認すると、その影響力の強さと根深さに驚かされる。そしてその力は現在も衰えることを知らずに、英語を学習する女子学生の精神構造を形成しているようだ。

キリ学にきたのも、アメリカ文化と英語に憧れていたから。お母さんと同じようにね。英語ペラペラになりたかったし。英語喋れるのはカッコイイし、キリ学では国際的な雰囲気の中でみんな楽しそうに勉強してるなって印象だったから。

学生が英語コミュニケーション学科を選ぶ理由も、やはりアメリカ文化と英語への憧れが根底にあるようだ。

「ガイジンの男と付き合うのはカッコイイからよ。ブランド物の服を着るのと同じね」、大学三年次の比嘉ゆかり（仮名）はそう主張する。「もし私がアメリカー（アメリカ人）とデートしてたら、同じ年の特に女の子たちからはリスペクトされるもん。英語ペラペラで国際的なんだねーって」と続けた。このインタビューに応えた全ての女子学生が、映画やテレビドラマ、音楽などアメリカ文化の強い影響のもと育ったと証言した。そして全員がアメリカ文化は沖縄文化や日本文化より優れており、アメリカ文化に同一化することは憧れであり最高のライフスタイルだと述べた。

彼女らのいう「アメリカ文化」とは、ハリウッド映画やMTVのミュージックビデオ、アメリカン・イーグルやGAPなどのファストファッションという大量消費用のイメージに代表される極めて表面的な文化であることが特徴だ。「たぶん私たち（米兵と交際する女性）の大半は、アメリカのドラマが好きだし、そのヒロインになりたいんだはず」と比嘉は付け加える。そして米兵で溢れる米軍基地周辺のバーやクラブは、その願望を叶える絶好の空間なのだ。

このような消費文化を通した現地文化のアメリカ化は、世界のいたるところで見られる。コカコーラやペプシコーラの看板は、食費さえもままならないネパールの奥深い山村を彩り、MTVは衛星放送を通して娯楽の少ない村で若者たちの憧れのライフスタイルとなっている。まさしく「世界文化のアメリカ化」が起きているのだ。そしてアメリカ文化とセットで「英語支配」も世界的に進行している。そのスピードは、グローバリゼーションのスピードに他ならない。

今回のインタビューに応えた多くの学生が、彼女ら自身そして友だちが高校生の時から米兵と交際を始めたと語った。「毎日ガイジンに会うし。なぜかってスタバ（スターバックス・コーヒ）とかココイチ（カレーハウスCoCo壱番屋）行くと必ずいるからね。普通に話しかけられるし。バイトとかしてたらもっとだしね」、とアメリカン・ビレッジのある北谷町で育った照喜名美咲（仮名）は述べる。

同じく米軍基地に隣接するコザで育った城間あかりは、アルバイトを通して米兵と交際するようになったと言う。

> 米兵と付き合っている私たちの多くは、バイトで知り合ったんだと思う。特にオンベ（オンベース＝基地内の意味）でバイトできたらラッキー。だってまるでアメリカにいるみたいで、英語も喋れるしマジ最高。別にオフベでも高校の時からバイトしているし、高校生でもガイジンに会う機会はたくさんある。だいたいFacebookとかLINEの連絡先交換するけど、それは英語を教えてあげるって言われたり、メッセージのやり取りでも英語の練習になるからいいなぁと思って連絡先教えるんだよね。

「英語を喋れるようになるため」に米兵と交際を始めたと答えた学生も多い。スマートフォンのオペレーティング・システムを英語で設定し、米兵が使うアプリケーションを活用することで、米兵のコミュニケーション・スタイルを模倣すると答えた学生もいた。

> ガイジンと付き合うのは親や周りから反対されることもあるけど、やっぱり楽しいし、英語の勉強って思ったら許してもらえるかなぁって。基地で泊まってPX（基地内にある軍属向けのショッピングモール）にも行けるでしょ。友達とかにも羨ましがられるし、誰でもできることじゃないさーね。やっぱりスペシャルな気分になるわけよ。

アメリカ文化、英語、そして米軍基地へのアクセス権は、今の沖縄社会において優位性へと繋がるものだと彼女たちは理解している。また交際相手の米兵が英語の宿題を助けてくれたり、アメリカ英語のスラングを教えたりすることにも、彼女達は大きなメリット感じているようだ。

インタビューをおこなった学生の中には、「一度、外人と付き合うと、もう日本の男には戻れない」と証言するものが少なくなかった。「ガイジンと結婚する運命だから」や「自分は中身はもうアメリカ人だし」と答える学生もいた。その理由を聞くと、日本人男性に対する批判が続いた。「もうなんか無理。自分たちよりレベル低いし」という学生の言葉には、日本人男性そして女性に対しても、自らの優位性の主張があった。

Ⅲ．沖縄で英語を学ぶということ
～言語帝国主義という視点から～

英語コミュニケーション学科の教育研究目的が謳うように、今や英語（特にアメリカ英語）は、世界共通語（リンガ・フランカ）である。そしてその背景には、アメリカの軍事的、政治的、文化的ヘゲモニーが存在し、英語と他の言語との間にも構造的位階序列の関係がある。そして英語教育はその構造を再生産する装置なのである（フィリプソン、2013）。

フィリプソンが指摘した「構造的」支配関係には二つの側面がある。一つは物質的なものであり、これは戦後アメリカ軍が疲弊し荒廃した沖縄に対して圧倒的な物質力を持って対峙したことで生み出された。生活基盤を失った多くの住民は、アメリカ軍からの配給に頼りながら食いつなぐ状態が続いた。米軍基地はアメリカの豊かさと権力の象徴であり、沖縄人の羨望の対象であった。もう一つの「文化的」側面においては、アメリカはフルブライトなどのアメリカ留学制度を駆使し、親米派となる沖縄人コロニアル・エリートを作り出した。「金門クラブ」（現ガリオア・フルブライト沖縄同窓会）は、1952年に設立され、帰沖した沖縄人留学生たちの多くが、琉球銀行や琉球開発金融公社など、戦後沖縄の再建に重要な役割を果たした琉球列島米国民政府系の特殊法人で職を得た。また大学において英語教育の先駆者となる者もおり、沖縄における言語帝国主義の文化的側面は、アメリカ軍とその傀儡政府によって計画的に作り出された。米軍支配下の沖縄において、英語の運用能力を有することは、社会的優位性と経済的優位性を意味した。

戦後、沖縄ではアメリカ兵による沖縄人の殺人事件や交通死亡事後が多発するが、日米地位協定の結果「無罪」判決が出るなど人権が蹂躙された結果、日本復帰への機運も高まっていた。そのような状況下で、米軍は沖縄に「第７心理作戦部隊」を設置し、無料の刊行物を通して住民を親米派に作り変えるための宣撫作戦を繰り広げた事例もある。現在も、在沖米海兵隊は『大きな輪（Big Circle）』という日英両言語で書かれた雑誌を発行し、米軍関連のプロパガンダを拡散している。また沖縄では「AFN（American Forces

Network、米軍放送ネットワーク）が、現地のテレビ放送に先駆けて1955年から放送された。現在、テレビ放送を受信できる地域は限られているが、ラジオ放送は、ほぼ沖縄県全域で受信できる。

米軍が発行する雑誌やラジオ放送は、沖縄で英語を学ぶ学生たちにとって格好の教材となる。そしてそのコンテンツは、単に英語支配を通して学生たちの精神構造をアメリカナイズするだけではなく、アメリカ軍の軍事的世界戦略や軍事主義を美化した内容を通して、学生たちの価値観さえも塗り替えていく。

沖縄県内には英語を学ぶためのユニークなプログラムもある。在沖米軍基地内にあるメリーランド大学は、渉外対策の一環として「基地内留学制度」を通して、沖縄県内の学生たちが基地へと通う事でアメリカの大学の学位が取れるプログラムを提供している。TOEFLの点数が満たない学生に対しては「ブリッジ・プログラム」を用意し、大学教育に合ったレベルの英語を習得できるようにしている。最近では、このブリッジ・プログラムが人気で、大学入学を前提としない学生が英語のみを勉強するという目的で基地内留学をしている。メリーランド大学側も、県内における英語教育、それもネイティブを教師とした「さながらアメリカにいるような環境」の需要に着目し、ブリッジ・ブログラムの拡大を図っている。特権である米軍基地へのアクセスとアメリカ文化に囲まれる環境は、英語を学ぶ多くの学生の欲望の対象であり、沖縄において精神構造のアメリカナイゼーションを推進する大きな力となる。

英語支配の一つの特徴として、ネイティブを頂点に英語のレベルからなるヒエラルキーの形成がある。つまり、英語をキャリアとして志す学生たちはまず、ヒエラルキーの下層分に自己を置くところから学習を始める。「英語コンプレックス」を抱いてのスタートである。そしてネイティブと接することによって、言語弱者である自己に気づき、その階段を駆け上ろうとするのである。その手っ取り早い手段が、最上層にいるネイティブとの自己同一化であり、そのプロセスを通して、言語強者であろうとする。「英語によるコミュニケーション」の社会的空間が、ほぼ米兵との関係性の中でしか見出せない沖縄の若者たちに用意された英語習得の回路は極めて限られたものとなる。在沖米軍は渉外活動の一環として、海兵隊員による「英語クラス」を運営しており、その英語クラスに参加する英語コミュニケーション学科の学生も多い。その英語クラスがきっかけとなり、米兵と女性学生の交際がスタートするケースも多く見られる。

コミュニケーション強者である米兵とコミュニケーション弱者である沖縄の若い女性の間の関係は、ジェンダー的要素も加わり、明確な上下関係として現れる。「英語を教えてもらう」という上下関係から始まった人間関係は、英語という言語に付随するアメリカ文化についても及び、文化的弱者として受動的立場に立つのである。沖縄の女子学生の中には、米兵によるデートDVやレイプを受けながらも、その背後に潜む軍隊の暴力性や民族差別的、性的差別的をアメリカ文化の洗礼として受け入れ、英語習得の一環と考えるケースが存在する。

英語の優位性は男性というジェンダーの優位性と相まって、恋愛関係における米兵の優位性と権力を確固たるものにする。そもそも家父長的文化色の強い沖縄である。多くの女性は地元沖縄社会においても厳しいジェンダー規範の呪縛から解放されずにいる。沖縄県が全国一のDV発生県である事実も、女性差別や女性に対する暴力を認めるような沖縄社会のジェンダー意識と無関係ではないだろう。そのようなジェンダー規範の中で育った沖縄女性にとって、米兵の男性としての優位性と家父長的権威を受け入れることは、より自然なことなのかもしれない。そして米兵の言語的・文化的優位性も英語習得というプロセスの中で確立されていくのである。

2016年５月26日の「沖縄タイムス」で、英国人ジャーナリストのジョン・ミッチェル氏が入手した、在沖縄米海兵隊が新任兵士を対象に開く研修の一部が明らかにされた。「沖縄文化認識トレーニング」と呼ばれるスライド・プレゼンテーションの中には、新任の兵士に対しての注意が喚起されている。その一つが、突然「外人パワー」により、現地沖縄女性からもてるようになるから気をつけろ、というものだ。この「外人パワー」の根底には、アメリカの揺るがないヘゲモニーがあり、英語というコミュニケーションの優位性も含まれる。「青い目・金髪」に例えられるような男性としての身体的魅力を有していないアメリカ人であっても、英語のネイティブ・スピーカーであることが、沖縄を含むアジアの女性から「モテる」要因となるのだ。

「外人パワー」とは英語支配とアメリカ文化帝国主義が生んだ人間関係力学に他ならない。

アメリカ主流社会においては、女性に対して積極的かつアグレッシブにアプローチする男性が、「より男性らしい」と認識されることから、特に男女関係の初期段階においては、男性がまくし立てることで会話の主導権を握ろうとする傾向がある。また、英語のネイティブ・スピーカーとノン・ネイティブの間にも同じような力学が存在する。会話の主導権を握るネイティブに対して、ノン・ネイティブは自然と沈黙を強いられる。自らの意思や考えがほとんど表現できないことからやがて聴く側へと周り、「Really?」（ほんと？） などのやたら簡単な相槌を蔓延の笑みで唱えるようになる。そのような沖縄女性の態度は、ネイティブ・スピーカーには、幼稚で無垢な存在に映ることであろう。これは、かつての植民地支配が作り上げたオリエンタリズムの中で西洋が東洋に抱いたイメージとも合致する。未発達で幼稚な沖縄女性は、支配し指導そして開拓されるべき存在なのである。フィリプソンが指摘するように「英語が人々を『文明化』するという考え方はアジアやアフリカで広く流布している」のだ（フィリプソン、2000）。沖縄もその例に漏れない。このような英語崇拝の状況を憂い、「それで人々の自由で平等なコミュニケーションは確立されるのであろうか？ 英語を話さない人々の声は理解されるのであろうか？ 英語が共通語であると、英語話者と非英語話者は平等に話をすることができるのであろうか？」と津田は問う（2006）。

このような米兵と沖縄女性の関係が、人種差別的で暴力を許容するようなものになったとしても何ら不思議はない。米軍基地に囲まれた沖縄の地域で英語を学習する若者は「英語のネイティブではない」というだけの理由で、低い自己肯定感もしくは劣等感を抱く可能性があるのだ。

英語を話すことに対してフィリピン人の間で「ノーズ・ブリード」という表現を使うことがある。基本、タガログ語を母語とするフィリピン人が、英語を喋る時には「鼻血」が出るほど緊張を強いられるという意味だ。アメリカ支配のもと、英語が生活や教育の場にあれほど溢れているフィリピンでさえ、ネイティブのように英語を話せないことに引け目を感じるのだ。失敗や辱めを怖れるノン・ネイティブにとって、このような心理的不安は、「コミュニケーション弱者」として周辺へ追いやられる結果を招く（津田、2006）。また、アメリカ支配の影響が強固だったフィリピンでは、英語をネイティブのように使えるかどうかで、社会的地位の上下が決まってくる。特権階級で育ったフィリピン人は、よりネイティブに近い英語を操り、「ノーズ・ブリード」と英語に対して不安を感じる者達は社会の下層部に位置する。

Ⅳ.「言語の乗り換え」（language shift）と「自己の乗り換え」（identity shift）

フィリピン大学で教鞭をとる友人は、「もしアメリカがフィリピンを51番目の州として併合することを決めたら、多くのフィリピン国民は両手を上げて喜ぶだろう」と嘆いていた。彼曰く、アメリカ支配はフィリピン人から誇りを奪い、魂の抜けた幽霊にしてしまった。これと同じことが沖縄で英語を学ぶ学生たちにもいえるのではないか。

講義で80人ほどの受講生に「英語か琉球語、どちらかペラペラになる魔法をかけてもらうとしたら、どっちの言語を選びますか」という質問をしてみた。そうすると全員が英語を選択した。グローバル化が進む中で、学生の多くは使用言語も英語に乗り換えた方が、自分たちに有利だと考えている。グループ・ディスカッションの結果、出てきた琉球語に対するイメージは、「田舎臭い」、「ヤンキー（不良）」、「仕事に使えない」などであった。対して英語に対する意見は、「カッコイイ」、「就職に役立つ」、「国際的」などが寄せられた。また「英語を習得するためには、何をするべきか」という質問に対して、多かった答えは「米軍基地の中でバイトをする」、「米兵と友達になる」、「ガイジンのボーイフレンドを持つ」であった。このような意見は、特に米軍基地周辺でその影響を受け育った学生から聞かれる傾向があった。「英語を習得するためには、この大学で学ぶだけでは不十分で、留学が必要」との意見もあった。

英語コミュニケーション学科は、ネイティブが英語の講義を担当する比率が沖縄県内で一番高い。そのネイティブの全てが白人である。学科自身もそれを入試広報戦略として利用している。その結果、高校における大学説明会等において「卒業したら米軍基地に就職できますか」という相談を頻繁に受ける。また在学生

の留学相談を受けていると、学科のネイティブ多数の環境にも満足できず、留学で完全なる英語環境を求める学生も多い。言語のみならずマナリズムやユーモア、価値観やアイデンティティまでも身に付けたいと望む学生は、留学が究極の英語習得法だと感じている。

留学から帰ってきた学生が、アメリカナイズされて誰だったか分からないほど豹変するケースもある。ファッションが今のアメリカの若者風に変わり、米兵との交際を求め、「せっかく伸ばした英語力をキープする」という理由で、米軍基地内のアルバイトにつく。カラーコンタクトの装着や日本社会ではまだ抵抗の強いタトゥーを入れる学生もいる。交際をしている米兵が白人か黒人かで、学生のファッションやメイクアップも変わる。聞き取り調査からも伺えるように、米兵の交際相手として彼女たちのアイデンティティは書き換えられる。英語で考え、感じ、自己表現し、英語の身体化を渇望する彼女たちのなかでは、「言語の乗り換え」のみならずアメリカ人への「自己の乗り換え」が起こっている。

アメリカが移民の国であり、現在も市民権を獲得する事で「アメリカ人になる」可能性が開かれていることも、彼女たちの自己の乗り換えを促す要因であろう。実際に沖縄では米兵との国際結婚が多く、彼女たちは米兵の帰国とともに婚姻関係を通して文字通り「アメリカ人になる」のだ。しかしながら、いくら市民権を得てある程度の英語を話せるようになったからといって、アメリカ社会から大手を振って受け入れられることはない。今日のアメリカ中心主義を支えているのは白人層であり、白人至上主義的潮流も盛り返しの傾向にある。単に英語を話せるからといって、アメリカ国内において黒人やネイティブ・アメリカンなどのエスニック・マイノリティーの社会的地位が上がることはない。彼らもまた「ホワイト・アメリカ」という白人的文化価値観への同化を通してしか社会的地位の保障を得ることができなかった歴史を持つ。

2017年７月にドイツで開催された主要20カ国・地域首脳会議（G20サミット）において、隣に座った安倍昭恵夫人に対し、アメリカのトランプ大統領が「ハローさえ言えない」と発言し、大きな議論を巻き起こした。ここにもアメリカ大統領の自文化中心主義が垣間見られる。総理大臣夫人という社会的に高い地位にいる人間が、英語を話せないわけがないと思い込んだのだろう。自文化中心主義は、しばしば異文化への理解を閉ざし、自分以外の文化・言語を見下す傾向を生み出す。「英語コンプレックス」と「アメリカ文化コンプレックス」を抱える学生たちは、アメリカの自文化中心主義に対して自らを同一化しようと試みる。文化的他者としてのアメリカを自己よりも優位と位置づけ、アメリカ文化と同一化するとともに、自己の中にある「沖縄的なもの」を払拭することで「アメリカ人」になろうとする学生たち。英語支配とアメリカの自文化中心主義のもと、沖縄で英語を学ぶ学生にアメリカ以外の異文化を理解し、多様な価値観を尊重し、多文化との共生は可能なのだろうか。

Ⅴ．英語による「異文化理解」と「多文化共生」の可能性

アメリカ留学から帰国したばかりの学生には、アメリカ文化の洗礼を受けて身につけたトレンディーなファッションに加えて、自信に満ちた顔つきが見られる。その自信を、異文化と言語的逆境において努力し、無事目的を果たして帰ってきたという体験からの成長と見ることもできる。しかしその「自信」と「成長」の背後には、英語支配のヒエラルキーを一段上がったという意識がないだろうか。英語力を身につけ留学から帰ってきた学生は、周りの学生から一目置かれ、羨望の眼差しを受けることになる。

聞き取り調査で集まった声の中には、米兵と親密な関係のある自分をアメリカ文化と同一視し、同世代の沖縄男性・沖縄女性を見下す傾向があった。彼女たちの中にも序列の関係が存在し、それは交際している米兵の軍隊でのランクに準じている。一般的にエリートと見なされる空軍の兵士と付き合っている沖縄女性は、なかでも位が高く、ランクの低い海軍、陸軍、そして最下位の海兵隊と付き合う女性を見下すようだ。同じ空軍でもよりランクの高い兵士と交際していると自らの地位も上がる。つまりは、軍隊の論理で交際している女子学生自身の人間的価値も決まることになる。そしてアメリカのものだったはずの自文化中心主義でさえも、彼女たちは自分のものとして同化していく。

米兵と交際をしている女子学生のほとんどは、在沖米軍基地の存在に対して肯定的だ。逆に沖縄の平和運動を「ヘイトスピーチ」だと批判し、人種差別的だと激しく糾弾する。在沖米軍基地の存在理由に関しても、

極東の平和維持のためであり、北朝鮮や中国の脅威から沖縄を守っていると言い切る。アメリカ政府とアメリカ軍（そして日本政府）の意見をそのまま自らのものとして踏襲するのだ。米軍が渉外活動の一環として流布するような地元平和運動批判や米軍の功績を讃えるSNS投稿が、英語コミュニケーション学科の学生により、共感のコメントが書き込まれ、シェアされる。イラク戦争の時には、米軍関係者の家族が装着するようなイエローリボンのマグネットを自らの車に貼って通学する学生も多々見受けられた。イエローリボンは、派兵された兵士の家族が無事の帰還を祈願して見にまとうものであるが、学生の中には交際相手の米兵が派兵された者もいたが、そうでない学生も「米軍を支援する」という理由で装着していた。長年、沖縄の歴史を通して培われてきた非暴力による平和運動や地元メディアによるアメリカ軍事主義への抵抗は、皮肉にも沖縄の学生たちによって否定されるのだ。

このような米軍との政治観や価値観の同化は、しばしば軍隊の暴力性を女子学生自身が内面化することに繋がる。20歳前後の若い米兵特有の暴力的かつ反人権的なスラングや、軍隊的マチズモやホモソーシャルに根を持つ女性差別的英語表現、そして敵対国民に対する人種差別的表現までも、「英語」として身体化する。軍隊のなかに存在する性暴力やイジメ、捕虜に対する虐待など、軍隊という特殊な社会性を孕んだ組織特有の暴力性までも内面化することがある。イラク戦争当時は、女子学生の間でイラク人に対する差別用語が聞かれるなど、日常会話のなかで社会的に許容されない暴力的な英語表現もしばしば使用されていた。

近年ではイスラム教徒に対する偏見や米軍の沖縄人に対する差別意識さえも、内面化し吐露するケースも見受けられる。この場合、沖縄人としてのアイデンティティがあれば自虐となるのだが、自らはもはや沖縄人ではなく「レベルアップしたアメリカ人」として沖縄人を見下した発言をするのだ。

アメリカ文化への同化を志向する学生にとって、目指すべきアイデンティティの「アメリカ人」であり、『沖縄』は距離を置くべき存在となる。アメリカへの同一化を志向過程で、下方に位置する『沖縄的なもの』は自らの内部にある『払拭されるべき文化的他者』として否定され蔑まれる。そして他者の中に同様な『沖縄的なもの』を発見する時、差別を持ってその他者を見下す。また序列のさらに下位にあると認識される文化や民族へも、同様の眼差しが向けられるのだ。しかし最大のアイロニーは、いくら同化を試みたところで文化的にも言語的にも、また民族的にも白人ネイティブを頂点とするヒエラルキーの中で、出自を同一とするナシオンの一員として完全に受け入れられることはないという事実だ。つまり同化のプロセスが完了することはなく、自らのポジショナリティが常に試される状況で、優位性を保証するには序列と差別により文化的他者を見下すことが必要となる。これは多文化共生の理念を基本とした異文化理解とは、真逆のベクトルを示す。

半世紀以上も前に、ハンナ・アーレントが『全体主義の起源』で明らかにした、帝国主義の基盤は人種的位階序列であり差別主義であるという原則は、日本や沖縄にも当てはまる。「脱亜入欧」とアジア諸国の侵略の背後には常に帝国の序列が存在していた。日本人は一日も早く「アジア人」であることをやめ、あらゆる社会性において欧米人に乗り換えることを目指した歴史を持つ。沖縄においても「人類館事件」や「方言論争」など、沖縄人自らが序列へ異議を申し立てるのではなく、見下した人々へ差別の眼差しを向けるという歴史があった。そして沖縄人の優位性を主張し、朝鮮人やアイヌ人など他の民族に対して差別意識を露わにしたのは、大和への同化主義者であるエリートが中心であった。アーレントが「解放されたユダヤ人」と呼んだ同化主義者の心理は、同じ帝国の序列と差別を生きる沖縄のコロニアル・エリートのメンタリティーと共通するものがある。また別府が「セルフ・オリエンタリズム」と呼ぶ自己と他者の関係も、津田が指摘する「精神の自己植民地化」や「名誉白人症候群」も、このようなコロニアル・メンタリティーの特徴を表していると言える（2005）。

在沖アメリカ軍は、その圧倒的軍事力のみならず文化的・言語的優位性をも誇示し、特に米軍基地周辺地域において未だに絶大な影響力を持つ。そしてその影響力は、昨今の中国・北朝鮮による「脅威」のもと、大衆の不安を煽り「強いアメリカ」へと拠り所を求める植民地メンタリティーを強化する。そのことがアメリカの文化的・言語的ヘゲモニーを保持するのだ。グローバリゼーションに伴う現在の「英語ヘゲモニー」は、アントニオ・グラムシが唱える通り、政治的強制

抜きに自発的同意という不可視的な力が英語支配へと大衆を引き寄せているのだ。

「リンガ・フランカ（共通語）」としての英語は決して中立的ではない。「英語は単なる手段・道具である」という認識は、その権力や構造的支配から目を背けることになる（津田、2005）。英語支配が孕む自文化中心主義と序列の関係は、「言語差別（linguicism）」や「言語抹殺（linguistic genocide）」などの言葉に表現されるように、言語にまつわる人権を抑圧し、極めて暴力的な差別構造を世界的に構築している。経済のグローバル化が地球規模で貧富の差を拡大しているのと同様に、英語のグローバル化も「持つ者」と「持たざる者」の格差を生み出している（津田、2005）。沖縄においては、歴史や社会的現状に対する理解が英語支配によって歪曲され、世代間ギャップを生んでいる。そして、本稿の問題意識は、英語支配の序列構造と植民的精神構造の再生産機能を大学の英語教育が担っているのではないか、という問いから始まった。

英語コミュニケーション学科では、入学時に英語能力に対するアセスメントをおこない、それに準じてクラス分けをおこなう。卒業までにレベルの階段をどれだけ登ったかが、ディプロマポリシーに沿った学生として評価される。この「高度な英語運用能力」の育成という教育目標は「英語支配」とアメリカ文化への「自己の乗り換え」という精神の植民地化を推奨する危険性を孕む。英語による順位づけは、現在の沖縄そして日本社会の反映とも言えるだろう。英語試験による就職、昇進、昇給など英語を軸とした序列の関係は、社会の中に広く存在し、その傾向は強まるばかりである。楽天やユニクロの社内英語公用化などを見ると明らかだが、英語を身につけることは、自分を社会の中の序列の関係の中で、上へと押し上げることを意味する。

沖縄キリスト教学院大学の建学の精神は、皇民化教育による戦争賛美と学生たちを戦場へと駆り立て多くの命を奪った反省にある。つまりアメリカ文化帝国主義と英語支配、軍事主義や言語帝国主義による希少言語への差別と抹殺行為、そしてそれに伴う人権侵害とは相反するものである。建学の精神に基づく英語コミュニケーション学科の教育理念は「他民族と異文化の理解を深め、他者へ仕え、少数者の人権を尊重する」ことにある。これもアメリカに憧れ英語を崇拝し、自文化を含む異文化を差別することとは、真逆の方向にあるはずだ。

英語コミュニケーション学科がこの先も英語を中心としたカリキュラム構成を取るならば、そもそも「なぜ英語を学ぶのか」、「何のために英語を使うのか」という基本的な問いに答えなければならないだろう。仮にも英語が「共通語」であり、文化的他者との「コミュニケーション」を可能にするならば、現在沖縄に多く在住するフィリピン人女性やネパール人留学生との対話を深め異文化理解や多文化共生に繋げていくことも可能だろう。英語支配のなかで、序列の下にいるフィリピン人やネパール人には目もくれず、米軍基地を沖縄における英語学習の総本山と容認し、白人ネイティブ至上主義に染まるような学生を育成する英語教育は、今一度見直されなければならない。他者の人権を尊重した異文化理解教育と自らの人権を守るための沖縄文化に対する理解教育が、これからの多文化共生社会に不可欠であることはいうまでもない。英語を利用した人権教育や国際理解へ向けたコンテンツを扱う英語教育が必要とされている。

おわりに

日本語と英語という二つの植民地言語で育った沖縄の学生にとって、琉球語は遠い存在である。しかし日本人として自認することに違和感を持つ学生も増えてきている。彼らが自己同一化できる社会空間はどこにあるのだろうか。

留学した際に、初めて本土の日本人と接触する沖縄の学生も多い。彼らの中には「中国人みたいなアクセントで日本語喋るね」と揶揄された、または「オキナワ」というニックネームをつけられた者もいるという。日本人との文化的差異や非差別体験が原因で、アメリカ人からの「何人？」という問いに対しても「ジャパニーズ」と答えず「オキナワン」と答えるようになる学生もいる。しかし彼らのオキナワンとしてのアイデンティティは、大抵アメリカ人からの「ハウ・アー・ユウ？ってオキナワの言葉で何ていうの？」や「日本人とどう違うの？」という質問によって機能不全に陥ってしまう。彼らの多くは沖縄の歴史文化に対する知識をほとんど持たない。それは琉球語に関してもいえる。

日本語のみの教育や生活環境の中で、「希少言語」としての琉球語は駆逐されてしまい、輪をかけるような英語教育によって、今や言語抹殺の危機に晒されて

いる。日本における英語支配批判において、「言語的主体性の回復」を謳い「日本語本位」の教育が叫ばれているが、琉球語の絶滅危機に直面する沖縄としては、言語的主体性の回復とは琉球語の復興を意味し、それまで琉球語を抹殺しようとしてきた日本語を主体とした教育を、沖縄で無批判に受け入れることはできない。沖縄キリスト教学院大学の建学の精神が批判する「皇民化教育」も、日本語という単一言語による支配に他ならない。

沖縄出身のミュージシャンであるビギンの「島人の宝」という曲の歌詞には、現在のマスコミュニケーションの言語的公共性の中には、もはや確認できない沖縄の文化的価値観や世界観が描かれている。

> 僕が生まれたこの島の唄を、僕はどのくらい知ってるんだろう。トゥバラーマもデンサー節も言葉の意味さえわからない。
>
> 教科書に書いてある事だけじゃわからない、大切なものがきっとここにあるはずさ。・・・テレビでは映せない、ラジオでも流せない、大切なものがきっとここにあるはずさ。それが島人ぬ宝。

もしもこの島に、グローバリズムを生き抜くような大切な宝のような価値観があるとするならば、その文化の復興と琉球語の言語的主体性の回復は急務だといえる。ソシュールに始まった構造主義言語学をひくまでもなく、人間の思考そして精神構造は言語によって作られる。とするならば、今の沖縄の英語教育に必要なものは、グローリゼーションによる競争に勝ち抜くことか、それとも共生共存の道を探ることか。この問いは、私自身への問いでもある。

参考文献

施光恒、2015年、『英語化は愚民化 －日本の国力が地に落ちる－』、集英社。

永井忠孝、2015年、『英語の害毒』、新潮社。

三浦信孝、2000年、「植民地時代とポスト植民地時代の言語支配 －言語帝国主義を発見原理として－」、『言語帝国主義とは何か』、藤原書店。

津田幸男、2006年、『英語支配とことばの平等』、慶應義塾大学出版会。

津田幸男、2005年、「同化と排除のシステムとしての英語支配～関係性の貧困を生み出す「国際語としての英語」～」、津田幸男編、『言語・情報・文化の英語支配～地球市民社会のコミュニケーションのあり方を模索する～』、明石書店。

鳥飼玖美子、2011年、『「英語公用語」は何が問題か』、角川書店。

別府春海、2005年、「英語支配とセルフ・オリエンタリズム～文化人類学者の立場から～」、津田幸男編、『言語・情報・文化の英語支配～地球市民社会のコミュニケーションのあり方を模索する～』、明石書店。

ロバート・フィリプソン、2013年、平田雅博ほか訳、『言語帝国主義　－英語支配と英語教育－』、三元社。

ロバート・フィリプソン、2000年、白井裕之訳、「英語帝国主義の過去と現在」、『言語帝国主義とは何か』、藤原書店。

English Education and "Linguistic Imperialism" in Okinawa: In the Case of "Okinawa Christian University"

Makoto Arakaki

Abstract

English has become a de facto "international language." However, "English" is not merely another popular language the world loves to learn. Its dominance constitutes and reconstitutes structural and cultural supremacy over other culture and language. The phenomenon is most prevalent in Okinawa where vast U.S military bases are concentrated. Students who are learning English at Okinawa Christian University show their desire not only to master the language, but also to assimilate into American culture, and eventually to become an American. On the other hand, their cultural identity as an Okinawan becomes "the inferior Other" in the hierarchy of linguistic and cultural imperialism. The University's curriculum reform is imperative to deconstruct the American cultural and linguistic imperialism and foster a sense of world citizenship.